
WORKERS

金剛石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WORKERS

【Nコード】

N2196J

【作者名】

金剛石

【あらすじ】

プロット消失につき、作者の傷心が癒えて再復帰するまでお留守になります……m(_ _)m

／「この世の中にどれくらいの仕事があるのか、お前は全部知ってるか？」

／「すり替え屋？ そんなの知らない。あたしの仕事は誰にも邪魔

できない。たとえ、すり替え屋でもね」

／「残念だが、依頼されたことなんでね。仕事なんだ。だから、あんたには死んでもらう」

／「別れさせたい方がいるんですか？　じゃあ、その仕事、引き受けますよ」

／「本当に大切なら、守ってみなさいよ。その一発にすべてを賭けて。あんたのビジネスは、的を撃つだけじゃないと証明してみなさい」

／「俺は人の笑顔を造るのが仕事なんだぜ。イカしてると思わねえか？」

／「自宅警備員と二ートは違うんだよ。自宅警備員は仕事なんだ」

「俺は毎日テメエらを見張ってた。自宅警備員ナメんな」

——六つの運命の歯車が動き出す

ワーカーズ「プロローグ」(前書き)

この物語はフィクションです。作中に出てくる組織や名前などは実在しないものも含まれています。そして、作者の力量不足で間違いなどもあるかもしれません。ご了承ください。

ワーカーズ「プロローグ」

仕事をするってのはめっちゃくちゃいいことだ。

以前、インターネットカフェで出会ったある男が言っていた言葉だ。

用事があって店に入ったときに、壁際の椅子に腰掛けて、いかがわしいアニメキャラクターが描かれた表紙の雑誌を読んでいたのを見かけ、気まぐれで話しかけてみたのだ。

外見はお互いに同じような年齢なので、そこまで相手も警戒心を持たずに話に乗ってくれた。

そうやって世間話やくだらな雑談を進めるうちに、その男自身は職を持っていないと知った。

自分が職に就いてないのにどうしてあんなことを言えるんだ、と質問すると「職には就いてるぜ」と答えた。そして、ニヤリと怪しげな笑みを浮かべて付け足す。

「自宅警備員だよ」

聞いたことの無い名に、私は少し興味を覚えた。自宅警備とはいったい何をする仕事なのかと。警備員と言うからには家の見回りでもするのだろうか。

「あれほど有意義で簡単な仕事は無いぜ」男がどこか誇らしげな顔をする。「ただ自分の部屋で籠城するだけでいいしな」

そこで、それはニートというものに似ている気がするが、と言ってみた。

「あんなものと一緒にすんじゃねえよ」と、太く黒いフレームの眼鏡の奥から、狐のような細い目で睨まれる。

どこが違うのか私には分らない。砂糖の溶けた水とただの

水道水を見た目だけで判別しろと言われていたようなものだ。

「ニートはただの引きこもりだ。やる気の無い廃人だよ。それに比べて、自宅警備員は日々戦ってるんだ。自分のためにな」

あまりに曖昧な答えに、何と戦うんだ？ と追及する。

「敵だ」

どんな敵だ？

「社会だよ」

どうして社会が敵なんだ？

「働く場所を与えようとしないからだ」

その答えに、意味が分からない、とうんざりする。自分が働こうとしないからだろ？ と返す。

結局は自業自得じゃないのか。

「違えよ」男が再び不機嫌そうな表情を作る。「俺が望む仕事がいままで経つても現れないんだって」

私は軽くため息をついた。だからそれは——と言いかけるが、その後続く言葉を飲み込む。何を言っても、どうせ屁理屈で返してくるだろう。そう思っただけで諦める。

ああ言えばこう言っただけでやっだ。

「この世の中にどれくらいの仕事があるのか、お前は全部知ってるか？」

男がアイスコーヒーを飲む私に訊ねてきた。

全部は分からないな、と答える。

「だろうよ。俺だって神様じゃねえから全部は分かんねえ」

その神様だって分からないことはあるんだ、と喉から出かけた言葉をまたもや飲み込む。今日で何回言葉を飲み込んだ？ まだ二回か？ 妙に疲れるのはこの男と話しているせいなのだろうか？

男が手に持っている雑誌を近くの書棚に戻す。書棚には アニメ

雑誌　と赤い文字で書かれた白地のプレートが取り付けてあった。
「じゃあさ、“サクラ” ってのは知ってる？　花だ、なんてくだらないこと言っなよ」

彼は新たな雑誌を手にして椅子に戻る。今度はいかつい人間型のマシンが、ライフルと未来的な剣を持って宇宙空間を飛び回って戦っている表紙の物だった。

サクラというのは店側と組んで客に成り済まし、他の客に商品を買わせるように仕向けるやつだろ？　と答える。

男は軽く頷く。「じゃあさ」いたずらっぽい微笑みを浮かべた。
黒いフレームの眼鏡のせいで、怪しいにやけ笑いにしか見えないのだが。

「“すり替え屋” ってのは知ってるか？」
スリカエヤ？　何だそれは？
思わず訊き返す。

「要は運搬物の中身を相手に届ける前にすり替える仕事をする奴だ。複数人でグループを組んでる。大抵は運搬会社や郵便局とかに“すり替え屋”の一員がいるらしい」

恐ろしいな。

「ああ、確かに。まあ、“殺し屋”よりはマシだ」
それはそのまんまの意味か？

「もちろん。まあ、色々種類はあるけどな」

あまりにもあっさりと答えられて、多少ながら驚く。そんな仕事をする奴が本当にいるとは思わなかった。しかも日本に、だ。ひょっとしたら、今日見てきた人間の中に“殺し屋”がいたのかもしれない。

「“レイパー”とかいう奴らもいる。雇われて女を襲う人間だ。ターゲットの女に恨みがある人間が利用するらしいぜ」

それはえげつない。他人を雇ってまでやることなのだろうか。
そう言えば、なんでこの男はこんなにも物知りなんだ？　ふと気になったので、雑誌に目を落としている彼に訊ねた。

「自宅警備員だから」

そう返ってくるような気はしていた。気はしていたが、本当にそう言うとは思っていなかった。

自宅警備員は何でも知ってるな。知ることが仕事か？

私の言葉に「まあな」とまんざらでもない様子で男が答える。自宅警備員は何でも知ってて、知ることが仕事だ、という意味の「まあな」だろう。

男は雑誌をパラパラと適当にめくって閉じる。どうやらあまり面白くはなかったようだ。

私は残っていたアイスコーヒを喉に流し込むと、また彼に質問した。

自宅警備員は社会と戦うんじゃないのか？

男は雑誌の裏表紙に目を落としたまま、上の空のように答える。

「社会と戦うさ。社会から仕事を奪うためにな」

一応やりたい職はあるという意味か？ と訊く。

「やりたくてやってる職業が自宅警備員なんだよ」

じゃあなんで社会から仕事を奪う必要がある？ という言葉が喉までせり上がってきたが、再三飲み込む。

まただ。この男と話していたら幾度も言葉が出なくなる。私の性格と彼の性格からそうなってしまうのだろう。どうも屁理屈を言う相手は苦手だ。

だんだん彼と真面目に話をしている自分が馬鹿らしくなってきた。アイスコーヒが入っていた紙コップをゴミ箱に捨て、別れ際に男に挨拶をしようと近づく。彼は自分のバッグからノートを取り出し、熱心に何かを書き込んでいた。

脇から覗いてみると、恐ろしいほど多くの数字が羅列されていた。足したり引いたり、掛けたり割ったりだ。見ているだけで頭がぐらつときた。

悪いな。話し相手になってもらって。

そう言って立ち去る私に、彼は返事をする。

「自宅警備員はいつでも庶民の味方だぜ」

だからそれはもういい。

ワーカーズ「プロローグ」(後書き)

感想や評価を頂けたら、作者が飛び上がって喜びます(ハ・ハ・ハヅ

Chapter 1：一つ目の齒車は齒が欠けている（前書き）

ピザ屋はピザを運び、引っ越し屋は家財を運ぶ。郵便局は手紙を運び、新聞の配達係は新聞を運ぶ。

“運び屋”は何でも運ぶ。

Chapter 1：一つ目の齒車は齒が欠けている

椎名

「すり替え屋？ そんなの知らない。あたしの仕事は誰にも邪魔できない。たとえ、すり替え屋でもね」

椎名は堂々と言い放った。何人をも釘付けにするような美しい顔に、迷いは無い。

細い眉に整った鼻、程よい狐目。漆黒の宝石のようにツヤのある長髪と白い肌のコントラストが眩しい。みずみずしい唇は化粧で誤魔化されてもいないのに綺麗な桜色をしていて、両端を吊り上げた妖艶な笑みを浮かべている。

その彼女の自信満々な顔を不安げな目で見つめる一人の男。ちょうど五十歳を過ぎたくらいの小太りした中年で、黒い髪にところどころ白髪が混じってきている。一見して平凡なサラリーマンという出で立ちだ。

とあるネットカフェで、この二人のスーッ姿の男女が金属製の小さな黒い机を挟んで向かい合い、同じ材質の黒い椅子に腰かけている。平日の真つ昼間だということもあって客の出入りは少なく、店内は空^すいている。

「そんなのどうなるか分からないじゃないか。世の中、できるで、と自信を持ってる奴に限って痛い目を見る」男は伏し目がちに椎名を見る。「あんたみたいなのがね」

男は小心者なのだろう。拳動の一つ一つからそれを判断する。

「それでもあたしに頼みに来たってことは、あたしなら“できる”と思ったからじゃないの？」

椎名はそういう肝っ玉の小さい人間は嫌いだった。うじうじと悪い方にはかり考えるし、やることなすことに自信を持てない。

自分とは正反対のタイプだ。

この男とは性別も反対だし、歳だってこっちの方が二十歳くらい若い。あっちはヨレヨレ、こっちはピチピチだ。何もかも相容れない。それに、あっちは依頼する側でこっちはされる側。

面白いまでに逆ではないか。

椎名の言葉を聞いた男は答えに詰まっていた。が、遂に諦めたように口を開く。

「ああ、あんたならできるだろうと思ってね」

認めたくなかったのか、渋々、といった面持ちだった。

「高くつくよ？」椎名は机に片手で頬杖をつき、注文してあったアイステイーの入っている紙コップから、ストローで中身を吸い出す。「美味しいね、これ」

余裕しゃくしゃくのその態度に、腹が立ったのか安心したのか、男は目を細めて自分の手元にある缶コーヒーを飲み干した。その缶コーヒーを持つ左手の肥えた薬指に、きらりと光る物が目につく。

「それ、結婚指輪？」

椎名がささず訊ねる。男は指輪を自分の太い指から外そうと小さく格闘し、諦めてそれを見つめた。

「結婚指輪、だ」

男はどこか誇らしげな面持ちになる。

「あんたの奥さん、幸せだと思う？」

椎名がさらに問い重ねると、男は少し考え込む仕草をとった。十秒ほど間をおいて、答えが返ってくる。

「幸せ、とは言い切れないだろうね」

「どうして？」

「そうだな……よく考えてみれば、俺は仕事だ仕事だって言って妻に家事を押しつけてきたからね。子供の世話も」

「サイテーだ」

「ああ、サイテーだよ。だから、ほんのささやかなお詫びに旅行でも連れて行ってやりたい」

「優しいね」

「そうかい？」

椎名はふと自分の左手に目を落とした。指は細長く、白い陶器のように綺麗な。だが、その美しい手を飾る物は何もない。マニキュアはもちろん、指輪も。

「独身かい？」ずけずけと男が訊いてきた。「美人なのに」

椎名の細められた狐目にジロリと睨まれ、男はたじろぐ。猫に睨まれた鼠、狐に狙われる“脂揚げ”^{あぶらあげ}だ。

「そういうのをセクハラって呼ぶのよ」

「そ、そうなのか」

「そうなの」

「セクハラの意味は広いね」

「私の心の面積に比べれば目じゃないわ」

「分かった分かった。すまない」

小心者なのに体は横に大きく、その上あたしにあんなことを訊くとは自殺願望まであるのだろうか。

依頼する相手に向かって挑発するとは、このオヤジ、自分の寿命をまっとうする前に死ぬな。

椎名はそれを口に出さずに押し留め、代わりに依頼の内容について確認をとった。

自宅に向かって車を走らせる中、椎名は昔のことを思い出していた。自分の左手の薬指に、トルマリンの美しい指輪がついていた頃のことだ。ちょうど十年ほど前、今のこの職に就く、二年前。

椎名は両親を交通事故で失い、途方に暮れた生活を送る羽目になった。これといった親族もおらず、孤立無援という最悪の崖っぷちに立たされたのだ。大学は親の収入に頼っていたため、中退。

ある日、飲んだくれて夜の街を歩いていて、二人の男に捕らえられた。そのまま路地裏に強引に引つ張りこまれ、当然のように着ていたものを剥がされる。

男達の邪な欲望よこしまと自らの心に溢れる絶望の中、自分を捨てようと考え、抵抗することをやめた。もうどうにでもなれ、そう諦める。

その時、路地裏に若い男が飛び込んできた。跳ねた茶髪の長身の若者だ。

彼は椎名を襲う二人の男を殴り飛ばして気絶させ、椎名の心が落ち着くまで自宅で面倒を看ていてくれた。彼は優しく椎名を慰める。そうして、事情を知ったその若者は、彼女を自分の家に住まわせることにした。椎名の家は売り払うことになった。

そして、二人は恋に落ちる。椎名にとっても、初めての恋愛だった。今まで、異性に対して何の興味も湧かなかったのだ。

付き合い始めてからちょうど一年。遂に結婚するに至った。

彼も椎名も身寄りがほとんどいなかったため、結婚式は彼らの友人達が集まる、ささやかなものとなった。

しかし、その幸せな結婚生活は一週間もしないうちに叩き潰される。

バイトから帰ってきた椎名は、家の中の廊下で倒れている血まみれの夫に遭遇したのだ。

彼はすでに冷たくなっていた。
心臓を一突き。刺殺だった。

それから約半年後、椎名は闇の世界の仲間入りを果たす。

裏世界の仕事に手を着けたのだ。夫を殺した犯人を探すために。

信号が赤になったので車を止めた。

目の前の横断歩道を四人の小学生の一団が通り抜けていく。

それぞれが手に細い木の枝を持ち、チャンバラごっこをして無邪気に遊んでいた。観察してみると、一番背の低い奴が一番強かった。他の三人の頭の黄色の帽子を、次々と軽く叩きつけている。歴戦の剣士顔負けだ。

信号が青になる。アクセルを踏み込む。エンジンが唸り声を上げる。

人探しをするのに、裏世界ほど役に立つものは無い。そこでは様々な情報が行き交っているのだ。

ところが、八年間働きがてらに情報を収集し、得られたものは皆無だった。

たった一つを除いて。

椎名は自宅に着くと、すぐさま二階にある自室へ向かった。扉を開け、荷物をベッドの上に放り、デスクに置いてあるパソコンの前に座る。スタンドの電気をつけると、明るく白い光が板のように薄いディスプレイを照らし出す。

夫が使っていた物だ。

『ちゃんと電気つけろって。視力が落ちるよ』

夫の言葉が頭の片隅でこだまする。

「ちゃんとつけたよ」無意識に答える。「いつもつけてるって」パソコンの電源を入れ、準備ができしだい隠しファイルを開く。

犯人の情報、ヤクザの動向記録、麻薬の運搬レポート

、アウトライン社の極秘試作品運搬レポート など、物騒な題のついたファイルが山のように連なっている。

物騒な連山ね、とくだらないことが頭の中をよぎる。

その中の一つに、どこにも見かけないような怪しげなソフトがあった。

Dark Party 4

“闇の宴4”というソフト名だ。マウスポインタがそのファイルの上まで滑ってきて、ピタリと止まる。椎名の人差し指が素早くマウスの左ボタンをダブルクリックした。

椎名が“闇の宴”の存在を知ったのは、裏世界に身を染めてから三年も経ってからだ。“闇の宴”シリーズは、裏世界の仕事を生業としている者達が、インターネットを通じてリアルタイムで情報交換を行うことができるソフトだ。それは巧妙にインターネット上に隠されていて、一般人はもちろんインターネット管理者などからも見つけれないようになっている。

仮に、管理者などの“敵”がこのソフトを発見し、証拠として確保しようとしても心配は無い。噂によると、このソフトを作ったのがよほどの天才ハッカーらしく、確保されそうになるとソフトに仕込んであった自爆プログラムが作動し、ソフトが何の証拠もなく消えてしまうようになっていたのだ。

ソフトの自爆後、跡に残るのが“残念でした、またどうぞ”(ー、ー)という戯れ言だということも、このソフトが裏世界で人気を集めている密かな一因らしい。

とある裏世界の住人のパソコンが証拠として警察の捜査班に回収されたことがあったらしいが、その時も例の戯れ言が残るばかりで、怒り狂った班員が腹いせにそのパソコンを叩き壊すといった事態が

多発したらしい。こちらの世界の住人からすれば、いい笑いの種だ。そのソフトも、数年に何度かアップデートされるらしく、今出回っているのは第四版目だ。しかも、近々アップデートされる第五版目では、事情の多い輩が使うであろうこのソフトに、コンピューターウイルス除去機能までもがついてくるらしい。

どこぞの裏世界の住人が、いかがわしいサイトを開いたがためにウイルスに感染し、パソコンが壊れ、修理に出したと思ったら自分の悪行がバレてお箱入り……なんてこともなくなるのだ。何せ、天才ハッカーの作るウイルス除去プログラムなのだから。一般に知られている有名所よりも、格段に性能が上だ。

椎名は目的のチャットルームに入室した。

“殺し屋”という大題の中の“人探しbyガ。ダム”というチャットルームだ。

このソフトのいい所は、チャットルームに入ることができる人数に、自分の好きなように制限をかけたり、入室する際にパスワードの入力を求めたりすることができるところだ。

そして、椎名が入室したのはパスワードつきの一対一の個別対談用、さらに言えば椎名専用のチャットルーム。そこで、唯一、情報を提供してくれる者が待っている。

1：椎名 投稿日：2002/5/15（水）14：57・32

>どうも

2：ガ。ダム 投稿日：2002/5/15（水）14：58・

01

> ほぼ時間通りだな。合言葉は？

3：椎名 2002/5/15（水） 14：58・42

> アイアムガンダム

4：ガ○ダム 2002/5/15（水） 14：58・57

> 違う

5：椎名 2002/5/15（水） 14：59・38

> 英語で書くのは嫌いまのよ

6：ガ○ダム 2002/5/15（水） 15：00・00

> それも合言葉とは違うな」（「」）

7：椎名 2002/5/15（水） 15：00・52

> あんた殴りたいの？

8：ガ。ダム 2002/5/15（水）15：02・07

>あんたの前にいるのはパソコンで、俺の顔があんたの前にある机に乗って喋ってるわけじゃない。

さらに言うと、タイプミスが多いぞ。キーボードばかり見てるからミスするんだ。せめてエンター押す前に画面を見るよ。

さらにさらに言うと、それも合言葉じゃない

9：椎名 2002/5/15（水）15：05・59

>あたしは指一本でなるべく早くタイプしようとしてるの。文句つけないで欲しいわ。今までのレポートを作る時とかも一本指打ちよ？

10：椎名 2002/5/15（水）15：09・01

>ちょっと、見てるの？

11：ガ。ダム 2002/5/15（水）15：09・37

>悪い悪い、トイレで“大きい”のしてたm（――）m
ていうか、あんた打つの遅いよな。おまけに、「早い」じゃなくて「速い」だと思うけど

12：ガ。ダム 2002/5/15（水）15：10・45

>別に俺みたいに無理に顔文字使わなくなっただけいい

13：椎名 2002/5/15（水）15：10・46

>（＃、皿、）トイレとかあたしをナメてんの？

14：ガ。ダム 2002/5/15（水）15：11・11

>案の定、顔文字を探してて時間食ったのか。
それより合言葉は？

パソコンの前の椎名は頭を掻きむしっていた。

「ああ、もう！ むっかつくわね！」

椎名は懷からメモ帳を取り出し、何かを乱暴に書きつけてパソコンのディスプレイの端に張りつけた。黄色い大きな付箋^{ふせん}だ。

～今週の買い物リスト～

・冷凍食品など

・野菜

・焼き肉ソース

・生理用品

Chapter 2: MT・HAKU (前書き)

祭。

豊作を祈ったり、悪疫を退散するために行く、神を崇め、祀るもの。

しかし、神はやかましいのを嫌う。
祭は好きでないと言う。

Chapter 2 : MT・HAKU

白山^{はくさん}。標高約二千七百メートル。富士山や雲仙普賢岳などと比べて、迫力に欠けるシンプルな名前の山だ。

だが、その山腹から眺める街の全貌、青海、遥か遠くに見える山脈、夜の星々などの景色は形容し難いほど美しい。訪れる者達が息を飲むような、瞳の瞬き^{またた}をするのも忘れるかのような絶景。それを臨むことができる名スポットだ。

自然に憩いを求める者、気分転換をする者、星を眺める者、愛を告白する者。様々な者達がその場所を目指して日々やって来る。それらが白山についての私の知識だ。

私は今、その白山にやって来ている。これといった意味もない。ただ単に、気まぐれを起こしただけだ。

以前、ネットカフェに入って黒ぶち眼鏡の怪しげな若者に声をかけたのと同じ動機。気まぐれ。

この街にやって来て何年が経っただろうか。二十年ほどか。人間にとっては、とてつもなく長い時間かもしれない。でも、この地球、いや、この“世界”の誕生するより前から私は存在していた。その年月に比べれば、二十年なんて数字はたかが知れている。

私の役目は“世界”を見守り、秩序を保つこと。

人間は子供達に学習をさせる習慣がある。数学、英語、国語など机の上でするものはもちろん、外に出て実習をすることもある。

ちょうど一週間前、黄色い帽子をかぶった小学生達の遠足に出くわした。街の外れにある大規模な公園へ行くついでに、近くにある文学歴史博物館に立ち寄るというものだ。

小学生の中でも高学年の集団らしかった。ワイワイガヤガヤ騒ぎ

ながら夏目漱石や福沢諭吉などの資料を読み耽^{ふけ}るその子供らしい姿は、見ているだけで不思議と愉快的気分になる。

私もその小学生の実習のように“世界”を見学しに行く。“世界”を見守る者の仕事ゆえ、知識は計り知れないほど多く必要になるのだ。

登山者用に設置された細い森の中の砂利道を登り詰め、件の山の観光ポイントに到着した。青々と生い茂る緑のアーチの向こうには、開けた広い観光用地が設置されている。老若男女、たくさんの人が集まっていた。

森からは蝉の鳴く声が絶え間なく響き渡り、目の前の群衆はお祭り気分で騒ぎ回っている。

はくさんかえんまつり
“白山夏炎祭”

白い幕に太い黒字の洒落た字体でそう書かれている。本当に祭だ。そういえば、一週間ほど前に「次の日曜日は祭だ」と知った記憶がある。どうせ人間達が集まってワイワイガヤガヤ騒ぐだけなのだろう。そうやって気にも留めなかったので、忘れていたようだ。まさか鉢合わせするとは。登山者が多いのもそのせいだ。

こっちのワイワイガヤガヤは実習で出くわした小学生達のワイワイガヤガヤとは対称的で、やかましい。不愉快だ。だいたい、こんなにも人が集まることのメリットがどんなものなのか、未だに分からない。寄り集まってロクなことが起きた試しがないではないか。少なくとも、私が知る限りではそうだ。

政治家達は国の問題を解決するのではなく、自分の地位を維持するために忙しい。だから、寄り集まって開く議会で飛び交うのは戯れ言ばかり。実際に効果を上げた国の政策も、折り重なる問題と見比べれば微々たるものだ。

ヤクザにしたって集まって組織にさえならなければ、ただの Yankee だ。不良だ。

ボーリングのピンも同じ。十本があんな狭い所に固まるから重い球体の一撃で皆吹っ飛んでいくのだ。十本がバラバラに点在していれば、全員が一挙昇天などという惨劇もなくなる。犠牲になるのは二、三本で済むだろう。

だが、人が集まることに意味があると言う人間もいる。

「三人寄れば文殊の知恵って言うだろ？」

私を説得しようとするある男に、それは三人だけの話だ、と即答する。

「綱引きだってそうだ。先生一人対クラスの子供達三十人だったら子供達が勝つに決まってる」

先生が日々トレーニングに努めれば、相手が三十人でも勝てるのではないか。子供の誰かが裏切って、縄を引くのをやめるかもしれない。そう私は言う。

男はしばらく押し黙り、口を開く。

「とある名言集に入賞していた言葉なんだが、“努力”は足し算。

“協力”はかけ算だ」

面白い言葉だ。私はその言葉に興味持って、意味を訊ねた。

「先生がトレーニングに努めれば、一人力は日々加算されて三十人力になるだろ？ 確かにそれなら一人力の子供が三十人と釣り合う」

大人のクセに子供一人と同じ力だったのか？ と私は突っ込むが、

男は無視して語り続ける。

「でも先生は一人で、子供は三十人だ。子供達は“協力”してるんだ。あんたの言う通り、裏切る奴もいるかもしれねえ。誰か一人でも裏切れば、子供達はゼロ人力だ」

子供が一人だけ裏切るなら、残るのは二十九人力じゃないのか。

私は再度男の演説に水を差す。

「だから言つたろ。“協力”はかけ算だつて」男は不機嫌になりながらも喋り続ける。「裏切つたそいつの力はゼロ人力だ。裏切るから、一人力の力を發揮しない」

とりあえず頷く私に、男は話を続ける。

「ある数にゼロをかけたらゼロになるんだよ。“協力”ってのは、みんながみんな参加して、初めて力を發揮するんだ。三十人いる子供達の一人が参加しないだけで、“協力”ってのは脆く崩れる。全員が揃わない限り、“協力”は成り立たない。でも“協力”してしまえば、かけ算にしてしまえば、数字はめちやくちやデカくなるんだ」

それを聞いて、私は納得した。だから人が集まるのかと。

“努力”は足し算。“協力”はかけ算。

一理ある。

しかし、騒ぐただけに集まり、“協力”するのはどうかと思う。私はやかましいのが嫌いなんだ。

山を下りようかという考えが一瞬脳裏を掠めるが、すぐさまそれを却下する。せっかく山道を登ってきたのだ。どうせなら、景色の一つや二つでも堪能しておいた方が得だろう。

私は“白山ホワイトハウス”という建物に入った。展望レストランや休憩所、温泉旅館などを兼ねた観光施設だ。

白山の近くには、城跡やその他の歴史的建造物、さらにはレジャーランドまで点在している。それらを目的とした子連れの親や観光客は、ほとんどと言っていいほど白山のこの名スポットを訪れる。そのため、食事をしたり、宿泊したりする施設が必要だ。白山ホワイトハウスはそれらの条件をすべて満たしている。だから、利用客は多い。ゆえに、建物自体も巨大だ。二階建てだが、横に延々と構

えている。

正面入口から入ってお土産屋の前を通り抜け、レストランに入る。建物は意図的に古風に造られ、内も外も日本独特の雰囲気たたえていた。

レストランの入口から中を見渡す。ほぼ、満席だ。祭があるおかげで、本日は大繁盛だろう。

今は夏だが、冬の白山は名前通りに真っ白な雪で覆われる。そうなれば、スキー場の解禁だ。当然、白山ホワイトハウスはスキー客の拠点となり、営業側はまた儲ける。春は春で桜が咲き乱れ、秋は秋で紅葉が美しい。観光客は寄つてたかつて押し寄せる。四季対応の観光地にある施設とは、贅沢なものだ。

レストラン内は、和風区間と洋風区間に分けられている。和風は畳の床で座布団を敷いて食事ができ、洋風は普通のファミリーレストランだ。

私は洋風区間の隅の窓際に空席を見つけ、そこへ向かった。

座ってみて、随分いい席だということに気がついた。レストラン内を見渡すように外に背を向けて座ると、左右斜め前の視界に展望窓が飛び込んでくる。絶好の展望ポイントだ。

茜色に染まる空。煌めく夕日。それを迎え入れる、キラキラと光を反射する広い海。

はたまた反対側を見れば、藍色に染まりつつある空。儂い輝きを放つ一番星。茜色に燃える、緑溢れる山々。

辺りはやはり喧騒に包み込まれている。ナイフやフォークが皿に触れる音。客の話し声。ウェ이터の注文を確認する声。店内に流れる音楽。

店員を呼ぶためのボタンを押してしばらく待っていると、ウェイトレスが早足でやって来た。短く切った茶髪が印象的な女性だ。かなり若く見える。

「お呼びですか？」

客が多くて呼び出しも頻繁なためか、彼女の息は弾んでいた。

「ああ」

メニューに一通り目を通していたので、注文の料理は決めてあった。

「ご注文は？」

「海鮮チーズドリアとビール（大）を頼む」

「海鮮チーズドリアお一つに、ビール（大）がお一つでよろしいですか？」

ウェイトレスらしく、快活な声と明るい笑顔。

しかし、私は彼女の瞳に垣間見る。快活な声は上辺だけの誤魔化しだ。顔に張りつけた笑顔も作り物だ。

「あんた、疲れてるな」

私は何の気なしに言ってみた。一瞬、彼女はきょとした顔をする。その後、再び取り繕った笑みを浮かべた。

「今日はお客様がたくさんいらしてますからね」

嘘だ、と見破る。

「違う」そう断言して私は彼女の目を正面から見つめ返した。「そんなんじゃないだろう」

彼女は驚いた顔をしている。私は、自分の向かいの椅子を示して声をかけた。

「取り敢えず少し休んだらどうだ」

ああ、気まぐれか。いつの間にかそうしている自分に気づき、適当に自己完結する。

「他の店員は忙しくて気づかないだろう。俺も管理人に告げ口したりしない」

彼女はしばらく逡巡^{しゆんすん}していたが、結局席に着いた。

「じ、じゃあ少しだけお邪魔します……」

ウェイトレスはふうと深くため息をついた。綺麗な顔だが、目の下にはうつすらと隈ができている。瞳は少し虚ろだ。

「水でも飲むか？」

小さな氷が無数に入った水を透明なガラスコップに注いでを差し出す。各テーブルに備えつけてあるポットの冷水だ。

「ありがとうございます……」

小さく礼をして、彼女は水を飲み始めた。ゴクゴクと喉を鳴らしている。ここは暑いわけではない。レストラン内は冷房が適度に効いているはずだ。

だいたい予想はついているので、その予想を口に出してみる。

「好きな奴がいるのか？」

水を飲み干す彼女から視線を外して海を眺めていたところ、視界の端でウェイトレスがむせ込んでいるのが見えた。

何かおかしいなことでも言っただろうか。

「けほっ……ど、どうして急にそんなことを訊くんですか？」

顔を真っ赤にしながら、掠れた声で言う。

「気まぐれだ」

「それ、嘘ですよね？」

「経験から推測しただけだ。今まで見てきたパターンがどれもそんな内容だったからな」肩をすくめて彼女の目を見つめる。「それとも違うのか？」

私が問い詰めると、彼女は視線を落とした。

「お客様はまだお若いのに、何でも知ってそうですね。おいくつですか？」

私は彼女が飲み干したコップに映る自らの姿を観察してみた。少し長めの黒髪、細く整った眉。形の良い鼻と唇。最近、この美男子の格好に扮して活動している。外見の年齢は二十代後半というところだ。巷ではこういう美人をイケメンちまたと言らしい。

「人間は面白いな。膨れ上がった恋心をもとに告白しに行つて、散っていく」

ウェイトレスはキツと睨みを利かせてきた。

「そんなことはありません。恋は結ばれるものなんですよ」

断固とした様子だ。それはまるで、彼女が自分自身に向けた言葉のように聞こえた。自分の恋は実る、そう願って言ったのかもしれない。

私は恋なんてしたことがない。あれこれ言うべきではないかもしれない。

「もうすぐ日が沈むな」

海が茜色の球体を呑み込もうとしている。

夜になるとますます人が増えた。もう九時を過ぎるという時間だ。良い子は早寝早起きをする^{と聞いたことがあったが、}ここにいる人間は全員悪い子なのだろうか。

むさ苦しい男達が神輿^{みこし}を肩に担いで練り歩き、付近のお寺で募集されたであろう巫女役の少女達が踊る。屋台は様々なものが出店していて、どれも賑わっている。

星の観察用に作られた広いスペースでは、射的の大会のようなものをやっていた。面白そうなので、野次馬に紛れ込んで観戦する^{ことにする。}

ちょうど決勝戦のようで、射手は二人だけしか見当たらなかった。一人はどこにでもいるような中年の男だ。緊張しているのか、汗で額が光っている。

もう一人は若い男だった。こちらは妙に胡散臭げだ。左目に黒い眼帯を着けている。そして、不自然なまでに落ち着いた振る舞い。さらに、彼は日本人らしからぬ容貌をしていた。少なくとも、親が外国人だ。白い肌に、黒髪。隠れていない右の瞳は灰色をしている。二人はそれぞれ黒いライフルを持っていた。ライフルの持ち手からは管が延びていて、ポンプのような機械に繋がっている。空気の圧力でプラスチックの丸い弾を発射する、エアガンだ。わざわざポンプで空気を送り込むのだから、かなり高性能なものに仕上げられているのだろう。

射手が立っている所から二十メートルほど離れた所に射的台があった。親指一本分ほどしかない人形が二つ立てられている。私にならどんなに遠くにあるものでも、大概は判別できる。あれは、鬼かたどを象ったものだ。

以前、眼科で視力を測る機会があった。専用の機械を覗き込み、計測してもらう。

計測が終わって、測ってくれた医師の顔を見てみた。目を見開いて、不思議そうに首を捻っている。

「すいませんお客さん、機械の調子が悪いみたいです。視力が10.0以上って、鷹の目超えてますからね」

最初に鬼の人形を狙い撃つのは中年の男だった。微かに手が震えている。よほど緊張しているのだろう。

自らを奮い立たせるかのように、勢いよく銃を構える。

狙いを定めているのか、銃口が揺れ動く。額の汗が、臨時に設置された夜間灯の白い光にキラついていた。

観客も息を潜めて見守っている。

男の喉が動くのが見えた。唾を飲んだのだ。

男の震える指がトリガーを引く。

発砲した。

銃口から飛び出した黄色い小さな弾が、まっすぐ宙を引き裂く。

それは鬼の足を掠めた。

人形がグラリと半回転する。

鬼は倒れた。

野次馬の間からどつと歓声が上がる。

「いいぞオッサン！」

私の隣にいる長い茶髪のヤンキーが叫んだ。若い男だ。

次はあの眼帯をした人間だ。その男から放たれるオーラは力強い。自分の腕に自信を持っているのだらう。撃つ前からの的に当たる事が確定している、という気にさせられる。

若い男はゆったりと右肩にライフルのストックをあてがい、標的の真正面に立って狙いを定める。

当たる、な。私は確信した。外す方が意外だ。

銃口から弾が撃ち出される。

私の予想は外れた。

若い男が撃った弾も外れた。

弾は射的台の後ろに立てられている防弾用の板を叩いた。

観客の中から、「痛っ」という女性の悲鳴が聞こえる。跳弾が当たったのかもしれない。

「あれえっ」

私の隣のヤンキーが声を漏らした。なぜそこで外すんだ、とでも言いたげな声音だ。

「どうした？」

私はその茶髪男に声をかける。

「あん？」

男が「誰だお前？」と言いたげな様子で睨んできた。もし私が中年のオヤジの外見をしていたら、ノミでも見るような目つきで凄まじく相手にされなかっただらう。

「何にびつくりしたんだ？ さっきの眼帯の奴が外したからか？」

若い“イケメン”の格好だと大概の人間は相手になってくれる。

老若男女、ヤクザでも不良でも然りだ。だから気に入っている。

「ああ、そうだよ。あいつ、あの中年オヤジよりかなり腕がいいはずなんだけどな」

ライフルを片手に持つて安堵の表情を見せる中年の男に目をやりながら、茶髪男が答える。

「準決勝までは普通の的が使われてたけど、眼帯の奴だけはいつも寸分違わずど真ん中だったのに。あの鬼の人形狙うより難しいと思うぜ」

茶髪男はべらべらと喋りたてる。

「でもあのオヤジも腕は悪くないな。それに、イヤツだ」

ヤンキーは手に持っていた謎の物体を見せびらかす。割り箸の先に、不気味な赤黒い球体が突き刺さっていた。テラテラと光を反射している。

「何だそれは？ 豚の肝臓か？」

茶髪男が一瞬呆気に取りられたように固まる。そして、爆笑し出した。

「違えよ。あのオヤジが射的屋で景品としてゲットして、俺に譲ってくれたんだよ。リンゴ飴って言うんだぜ、これ」

「なるほど。豚の肝臓はりんごあめと言うのか。初めて知った」

「うるせーな。何回も言うなっつーの」

男は豚の肝臓を美味そうに舐め回しながら、笑っていた。こんなものを売り物にする店があるとは、そのセンスを疑う。それを美味そうに舐める目の前の茶髪男も、正気かどうか疑う。

表彰台の中年オヤジは、巨大な黄色い熊のぬいぐるみを渡されていた。蜂蜜が大好きな熊で、可愛い可愛いと人気があるキャラクタ―だ。

眼帯の男は既に見当たらなくなっている。

十時五分钟前。

祭にやって来た人間達は、一様に座って、待っている。
花火だ。

先ほど、“りんごあめ”を売っている店で例の物を買った時に店主から教えてもらったのだ。

「あんたも早めにいい場所を取つといた方がいいよ？ どうせ彼女がいるんでしょ？」

私が“イケメン”なのを考慮した上で言ったのだろう。さらに有り難いことに、いもしない彼女のために豚の肝臓をもう一本オマケしてくれた。冗談じゃない。試食に一本買おうと思ったただけなのだ。二本も要らない。

「ほらほら、他のお客さんが待つてるから」

店主はウィンクしながら私を店の前から追い払う。

というわけで、私は豚の肝臓を片手にそれぞれ一本ずつ持ちながら花火の見えやすそうな場所を探している。

花火の打ち上げに備えて、夜間灯が消されていく。腕に着けている時計を見る。

十時三分前だ。

空には宝石を散りばめたかのように星が輝いていた。山の上では空気が綺麗だからだろう。瞬き^{またた}一つしない。

暗闇の中、星明かりを頼りに射的大会が開かれていた場所を目指す。会場は片付けられていたため、幾分か空きスペースがあるはずだ。それに、あそこは星の観察用に作られた広場だ。花火もよく見えるに違いない。

辺りはいつの間にか静寂に満ちている。やっぱり静かな方がいい。星の観察広場は人で埋まっていた。皆が皆、空を見上げて待ち構えているその光景は、どこか非現実的だ。

「おっちゃん、ここ空いてるよ」

おろおろ辺りを見回している私に向かって、四人組の少年達が手を振っている。全員が光る棒を持っていた。

おっちゃん。あいつらからすれば私はおっちゃんなのか。

十時一分前。

「その光る棒は何に使うんだ？」

私は四人組の少年達の隣に座り込み、訊ねた。眼鏡をかけた奴が一人。ちっちゃいのが一人。ガリノツポが一人。肥満体が一人だ。

「これはチャンバラに使うんだよ」ちっちゃいのが答える。

「ライトセーバーだね。『フォースを信じる』って」と肥満体。

「ぷしゅー、ぷはぁー」赤く光る棒を持ったガリノツポ。奇妙な音を出している。

「それダースベイダーの真似？ 似てないよ？」ちっちゃいのが突っ込む。

眼鏡の奴は静かに空を見上げていた。妙に落ち着いている。

「チャンバラか。よくやるのか？」

とにかく長い物を剣に見立てて打ち合うやつだ。

「うん。でも波亜人^{はあに}が一番強いんだ。何回叩かれたことだか」

ガリノツポがちっちゃいのを指差して言った。ちっちゃいのはまんざらでもない様子で答える。

「剣道やってるもん」

その時、眼鏡の奴が口を開いた。小さな声だったが、はっきり耳に届いた。

「十時になるよ」

ふとりんごあめを二本も持っていることを思い出す。

「お前ら、豚の肝臓は欲しいか？」

怪しげな物体を、ほれほれとこれ見よがしに振って見せる。
揃って首を横に振られた。

美味しいものじゃないのか、これは。

「十時だぞ。ショータイムだ」

観衆の中から、誰かの呟きが響いてくる。

Chapter 3：運び屋（前書き）

青年は、歩道で走っていた。正面から中年のサラリーマンが歩いてきている。

途中で、そのサラリーマンとぶつかった。

「いてっ」

「あ、おじさん、ごめんなさい」

そして、しばらく走って距離をとると、青年は曲がり角を曲がった。

「何だよ。いい年したオヤジがこれっぽっちか」

青年はオヤジからスった財布をヒラヒラと振った。

中には千円程度のお金しか入っていなかったのだ。

青年は盗った金を自分の財布に入れようと、尻のポケットに手を突っ込むが、無い。

慌てて、全身のポケットというポケットをまさぐるがあるべき物が、無い。

「うっわ、最悪」

青年は道端の空き缶を蹴り飛ばす。

「スったはいいいけど、自分の落としたじゃねえか」

「ほお、ガキのクセして大金持ちやがって」
先ほど青年とぶつかったおやじは、青年の財布をヒラヒラと振った。

中には十万円もの大金が入っていたのだ。

オヤジは走り去っていく青年を見送ると、空を見上げて歩き出した。青年は、自分が財布を落としたものだと思い込んでいるだろう。スった相手にスられる。まさか、そんなサスペンスドラマにあるような出来事が起こったとは思えないはずだ。

オヤジはそう予想立てて、ほくそ笑んだ。

今日も、悪党達は悪行に精を出している。

Chapter 3：運び屋

「五号車の荷物、積み終えました」

女性のアナウンスがスピーカーから響いてくる。

横須賀は自分が担当するトラックの出発準備が整ったと知り、休憩室を出た。

会社の運搬トラックが格納されている車庫へ向かう。比較的大きな輸送会社なので、社内も広い。

車庫へ向かう長い廊下を歩いていると、廊下の端の車庫に通じる扉が開いた。作業帽をかぶった男が車庫から入ってくる。この会社専用の作業服を着ていた。同僚だ。

「お、五号トラックの運転手さんですか？」

向こうがにこやかに笑いながら、陽気に右手を上げてくる。帽子から覗く髪は真っ茶っ茶だが、人懐っこそうな若手社員だ。

胸のネームプレートを見ると、“くりば 繰場”と書いてあった。半年ほど前に、ここに入社したという珍しい名字の若者だろう。

「よう。どうした？」

こちらも右手を軽く掲げ、笑って応える。

「ちょうど今、五号車に荷物を入れてきたところなんですよ」

繰場がすれ違いざまにこちらを向いて、そう言った。

「じゃ、配達頑張ってください」

手を振る繰場が背後から見送った。

横須賀は車庫への入口をぐぐり抜けながら、今時の若者にしては珍しく毒のない奴だったな、と思い返す。人懐っこい雰囲気は、彼の人格を表しているのだろう。

そんなことを考えていると、唐突に声をかけられた。

「あ、ご苦労様」

薄暗い車庫内で、近くにある小型トラックの影から女性社員が歩

いてきたのだ。

「どうも。そっちは今終わったのか？」

輸送会社の社員にしては華奢な体つきの女性だった。端正な顔立ちで、女優だと言っても通用するだろう。

「うん。今終わったところ。……ええっと」

近づいてきた彼女が、目を細めて横須賀の胸部を睨む。ネームプレートを確認しているようだ。

「横須賀さん……はこれから仕事？」

「まあな。ところで、椎名さんは目が悪いのか？」

横須賀は女性のネームプレートを見て、訊いた。見かけない顔だったからだ。

椎名という女性は、照れたような笑みを浮かべて答える。

「家ではよくパソコンを使うので……」

「なるほど。スタンドの電気はいつも点けておかないと」

老婆心を起こして横須賀が忠告すると、女性はまた笑った。

「それ、よく夫に言われた」

「妻を気遣ういい男じゃないか」

「そうでしょ？」

女性は自慢気に言った後、少し憂鬱な表情を作る。

「でも、周りを明るくしても、ずっと画面と睨めっこじゃ目が疲れるのよ。やっぱり視力落ちたかな？」

「まあ、あんまり目に負担をかけないようにな」

横須賀は軽く手を振って、再び歩き出した。あまり時間を潰し過ぎるわけにはいかない。

すると、「あっ」と言っただけで女性が横須賀を追いかけてきた。

「ちょっと忘れ物を」

横須賀の隣に女性が並んで歩き出す。

「横須賀さんは何号車担当？」

「五、だな」

「あたしは七号車。ほぼ隣ね」

横須賀は五号車の貨物庫の扉を鍵で開ける。出発前に荷物を確認するのと、他にもやることがあったからだ。

しかし、突然、横須賀の目の前が真っ暗になった。辺りが闇に吞まれる寸前、後頭部から鈍い衝撃が伝わってきたのを横須賀は感じた。

椎名

「ごめんなさいね」。 “すり替え屋” さん。横須賀さん、あなたの調べはもうついてるのよね」

椎名は、地面に伸びている男に向かって舌を出す。

七号車に向かったと見せかけて、背後から襲うチャンスを見計らっていたのだ。

「あたしの仕事は誰にも邪魔できない。たとえ、すり替え屋でもね」
椎名の両手には、黒い革製の手袋が付けてあった。指紋などを残さないためだ。

倒れている男を手早く掃除用具庫に引きずり込む。そして、壁に上半身をもたれさせるようにした。ズボンのポケットに入っている五号車の鍵を奪う。

椎名は自分の腰のポーチから缶ビールを二本取り出した。そのうち、一本のタブを開け、横須賀の体や床に中身を適量こぼす。あつという間に用具庫にビールの臭いが充満した。そして、まだ中身のあるその缶を横須賀の隣の床に置き、男の手を缶に添えさせる。

さらに、用具庫内の棚から硬くて重い鉄製の箱を引き出し、それ

を床に倒しておいた。ついでに箱の中の工具をばらまいておく。こうすれば、一見、飲んだくれて用具庫に入り、上から落ちてきた工具箱が頭に当たって気絶した、という印象を受ける。

椎名が持ってきたもう一本のビール缶はすでに空からのもので、床に転がしておいた。

準備を整えると、椎名は用具庫を後にした。横須賀も、自分が他人に気絶させられたとは思わないだろう。

人間はそういうサスペンスドラマのように非現実的な出来事が自分の身に起こる、ということなど普通は考えないものだ。考えるとしたら、よほどの被害妄想か、このような状況に陥って、藁にもすがるといふ思いで上司に言い訳するであろう横須賀くらいだ。結局、飲んだくれていてヘマを侵したただだろう、と一蹴されるのは目に見えているが。

十中八九、横須賀はクビになるだろう。しかし、クビになったとしても、輸送会社に“すり替え屋”として潜り込んでいただけなのだ。どうせ別の力モを囲いに行つて、生計を立てるに違いない。

椎名は口笛を吹きながら五号車の貨物庫に入った。大小様々な段ボール箱が積載されている。

一番奥の段ボール箱に目をつける。小さな水色の箱が、棚に収納されていた。その近くには、似たような大きさの箱がいくつか整理して置かれている。

水色の箱を手にとって、貼られているシールを調べると、“ゲームソフト”と表示されていた。商品番号を確認すると、依頼主が言っていた通りのものだ。

椎名は、ヒュウ、と甲高い口笛を吹いた。

信号が青になり、椎名はアクセルを踏み込む。止まっていた車が徐々に加速していく。

あとは、ブツを依頼主の元へ確実に届けるだけだ。

椎名の乗る黒いセダンのナンバープレートは偽装されている。本来取りつけられているプレートの上に、もう一枚、違うナンバーの記された薄いプレートが重ねてあるのだ。万が一、誰かに目をつけられても、カモフラージュ用のプレートを剥がすか、付け替えるかするだけで免れることができる。

車を走らせること数十分、椎名は待ち合わせの場所に到着した。

以前、小太りの男と打ち合わせをした、ネットカフェだ。

服は例の輸送会社のトイレでスーツに着替えてあったので、ブツをバッグに入れて普通に車から降りる。

椎名がネットカフェの前まで歩道を歩いていくと、散らばった紙をかき集めている中年の男にばったり出くわした。何人かの親切な人間がそれを手助けしている。椎名も、それを手伝うために地面に屈んだ。

紙を見てみると、何かの学習教材のチラシだった。見やすいようにカラフルに色分けされている。シャーペンを持って勉強をしている真剣な表情の少年が写真として載っていた。眼鏡をかけているせいか、優等生に見える。

「ああ、わざわざありがとうございます」

額にうつすらと汗を浮かべた中年の男が、羞恥の笑みを浮かべて礼を言う。無精髭を生やしているが、比較的さっぱりとした顔つきが印象的だった。

「いや、歩き回って汗をかいたので、ちょっと袖で拭おうとしたんですが」

無精髭の男は自嘲気味にそう言うと、皆が集めたチラシを回収していく。

「皆さん、ありがとうございます」

椎名も、集めたチラシを男に渡した。そのついでで、と言うよりいつものクセで、男の胸部にあるネームプレートを確認する。

“五十嵐^{いがらし}歩^{あゆむ}”と記されていた。

「五十嵐、って珍しい名字ですね」

椎名は、集まったチラシを整えている中年の男に声をかける。

「おお、よく読めましたね。けっこう間違えられるんですけど」

男は感心した様子でこちらを見る。ふと、運輸会社で見かけた場所と言う若手社員や、“すり替え屋”の横須賀を思い出す。どれもあまり見かけない珍しい名字だ。今日は珍しい名字をよく見かける。「さすがに五十嵐いそあらいと言う人はいないでしょ」

そう言つて、椎名と五十嵐が笑い合っていると、唐突に声が割り込んできた。

「それは五十嵐いそあらいとは読まないのか。初めて知った」

五十嵐の笑顔が一瞬引きつる。椎名が声のした背後を振り返ると、チラシを集める手伝いをしていたうちの一人がまじまじとこちらを見つめていた。

黒い髪の毛を長めに伸ばした、ラフな格好のイケメンだ。あまりの美形に、椎名は驚く。十人女性がいたら、十人全員が憧れるだろう。

あんな鈍いことを言ったが、別段、悪気があつた様子でもない。

「すまない。勘違いしていた」

今時の若者にしては珍しく、素直に謝る。そして、どういふわけか堅苦しい言葉遣いだ。

「用事があるから、この辺でお邪魔する」

呆気にとられている椎名達を置いて、青年はとっととネットカフェに入つていった。

「変な子ですね」

店の自動ドア越しに、先ほどの若者の背中を見つめている椎名が呟く。

五十嵐は少し考えて、苦笑しながら答えた。

「世の中、変な人間ばかりですよ。変人つてやつとか」

「あの子、人間じゃないかもよ？」

椎名が冗談混じりに肩をすくめてみせる。

五十嵐は、笑いながら「そんな馬鹿な」とおどけてみせた。

椎名はネットカフェに入ると、例の青年が黒ぶち眼鏡の怪しげな若者と隣り合って座り、喋っているところを目撃した。

黒ぶち眼鏡の男は、書棚からアニメ雑誌を取り出して読んでいる。人間型の機械が、ビームサーベルとかいう未来の剣を持って戦っている様子が描かれた表紙のものだ。

その若者二人組を無視して、どんどん店の奥へ入っていく。一番奥のテーブルで、例の小太りの男が座って待っていた。どこか落ち着かない顔で、そわそわと辺りを見回している。

まるで拳動不審だ、と椎名は呆れた。

「遅いじゃないか」

こちらに気づいた男が、あからさまに安堵の表情を見せる。

椎名は、腕時計を見て「人助けしてたの。ボランティアよ、ボランティア」と言い訳する。

「あんたの言った通り、やっぱり“すり替え屋”が絡んできたわ」男の向かい側の椅子に腰掛けながら、報告した。

「やっぱりな。それよりも、依頼品はどこに？」

金が入っているのであろう茶封筒を取り出しながら、男が訊ねる。

「これよ、これ」

椎名が、自分のバッグから水色の小さな段ボール箱を取り出す。

それを男に差し出した。

男は満足げな面持ちで報酬をテーブルの上に置き、箱を開け始める。

「さすがだよ。“すり替え屋”の手をかくぐって持ってくるとはね」

「それができると見込んだ上で頼みに来たんでしょ？」

椎名がまんざらでもない様子で答える。「言っただじゃない。あた

しの仕事は誰にも邪魔できないって」そして、テーブルの上に置いた茶封筒に手を伸ばす。

その茶封筒を椎名が掴む前に、男がそれを押さえつけた。椎名が驚いたような表情で男を見る。

男は箱の中にあつたディスク用のケースを凝視していた。額に脂汗が滲み出ている。

「あの時、あんたはこう言つたよな。たとえ“すり替え屋”でも、自分の仕事は邪魔できない、と」

「そうだけど？」

椎名がきょとした顔のまま言葉を返す。

「私がこう言つたのも覚えてるか？」

「何？」椎名は怪訝な顔で思案する。

「自信過剰な人間ほど、世の中で失敗する、と」

「分かつたから、早くお金ちょうだいよ」

男は暗い顔で椎名を睨みつけた。

「無いんだ」

「何が？」

男がディスクのケースを開いて椎名に突きつける。

「中身が」

椎名は突きつけられたケースを啞然として見つめた。

「これはどういうことだ？」

青ざめた顔の男が、声を震わせて問い詰める。

椎名は上の空で呟いていた。

「信じられない」

そんなサスペンスが起こるなんて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2196j/>

WORKERS

2011年4月13日20時07分発行